

中国の幼稚園教材から見る農村部の就学前教育改革  
—2001年以降浙江省における年長児向け教材の「言語」領域記述の量的変化に着目して—

盧 中 潔\*

Early Childhood Curriculum Reform of Rural Areas in China from  
the Change of Kindergarten Teaching Materials:  
Focused on the Quantitative Changes of Early Literacy Description among the Teaching  
Materials of ZheJiang Province after 2012 for 5-6 year-old children

LU Zhongjie

Abstract

The purpose of this study is to clarify the characteristics of literacy education in rural areas of China through teaching materials for 5-6 years old, and from the perspective of early childhood curriculum reform. This study analyzed 2 sets of teaching materials for children published by Xinshidai Press. The first edition was published in 2002 and the second edition is in 2014. In this study, number of pages that mentioned about topics of language education were counted.

As a result, following 2 points became clear. Firstly, the curriculum of literacy is becoming more integrated. Secondly, the percentage of “language” category in 2014 is higher than 2002. Then, this study tries to analyze above characteristics of the kindergarten teaching materials from the perspective of the safeguard of educational equity.

Keywords : Kindergarten China Rural Areas Teaching Material Educational Equity

1. はじめに

本稿は、中国農村部の幼稚園教材における言語能力の育成はどのような内容の変化を経てきたのか、国家政策の変容と関連させながら明らかにすることを目的とする。

中国の教育政策は1970年代以降、経済の改革のもと大きく変化した。経済改革では「対内改革、対外開放」（以下では「改革開放」と略す）が叫ばれ、市場経済体制が形成され、経済的な競争力を高めるため国内外の投資が歓迎された。「改革開放」当時における中国の教育政策では、国の経済的な発展に貢献できる国家のための人材の育成を目指すということは国家のニーズとして目指された。改革を主導した鄧小平は1985年に「我々の政策は、先に豊かになれる者たちを富ませ、落伍した者たちを助けること、富裕層が貧困層を援助することを一つの義務にすることである」という、「先富論」と呼ばれる「改革開放」に関する基本原則を提示した。しかし、鄧小平が主張するこのような「先富論」は、結果的に地域間の格差を助長させるものとなった。「経済的に豊かで、工業化され、ステータスの高い」都市部と、「経済的に乏しく、農業的、ステータスの低い」農村部という対立した構造が作られることとなった（Chambers 1983: 4）。経済的な格差を劇的に拡大しただけでなく、教育水準でも甚大な都市部と農村部の格差が形成されることとなった（王 2013: 105）。XuとLawもまた、都市部の教育

---

キーワード：幼稚園、中国、農村部、教材、教育の公平性

\*平成28年度生 人間発達科学専攻

の機能は重要視されるのに対し、農村部の教育は周縁的、疎外される位置につけられていることを指摘している (Xu & Law 2015: 80)。

このような中国における経済優先の政策による教育政策に対して、90年代になると、学力偏重等の問題が懸念されるようになった。1999年には、それまでの国家のための人材育成という人的資本の方向を見直し、児童生徒の全面的な成長を目指す「素質教育」改革が目指されることとなった。就学前教育の場合、2001年に「幼稚園教育指導綱要」(以下「綱要」と表記する)が20年ぶりに改訂され、「子どもを中心に」という子どもの主体性を重要視する方向に転換しようとするカリキュラム改革が進められることとなった(劉ほか 2007)。さらに、2012年には「3-6歳児における学習と発展に関する指南」(以下「発達指南」と略す)という就学前教育を方向付けるナショナルスタンダードが中央政府によって公表された。同じ時期、2010年には、中央政府は10年後を目標とする「国家中長期教育改革と発展企画綱要(2010-2020)」を公表した。その中で、「公平を国家の基本教育政策にする。教育公平は社会公平の重要な基礎である」、「格差を縮小するため、農村地域、辺境地域、民族地域に政策を傾ける。教育公平を保障する主要な責任者は政府である」と規定した。さらに、ここでは「農村の就学前教育の発展に重点を置き、就学前教育をより広く普及させる」という農村を重視した政策の方向が示された。このように現在に至るまで中国では教育政策において、学力偏重を乗り越え、児童生徒の全面的な成長を目指そうとする動きがあり、また、都市部と農村部の教育格差を是正しようとする動きがみられてきたといえる。では、こうした中国政府による教育改革の中で、就学前教育はどのように変化してきたのか。特に、2001年発表された「綱要」以降の教育政策の変化は、就学前教育にどのような影響を与えたのか。本稿では、幼稚園教材のうち、教育水準で都市部と甚大の格差を持つ農村部(浙江省)の教材に注目することとした。

今回浙江省の教材を分析対象としたのは、以下の理由による。浙江省は中国の沿岸地域の省の中で農村戸籍をもつ人口が最も多い省で、2010年では農村戸籍を持つ人口は405.2万人で、浙江省全体の75%に至る。浙江省は中国の東部沿海地域の33の県から構成されているが、そのうち26の県は省政府によって「低開発県」<sup>1</sup>に指定され、それらは全て農村地域である。このように農村人口を多く持つ浙江省だが、2015年の中国の就学前3年間の平均入園率が75.0%であるのに対し、浙江省の入園率は98%に至っている。これは中国の農村地域における平均入園率の30.1%を遥かに超える数値である。就学前教育における都市部と農村部の格差が存在する一方で、農村部において就学前教育を受ける機会が保障されている浙江省は「質の高い農村就学前教育」を推進するための実験モデルともいえる。したがって、農村戸籍の人口を多く持つ一方で、浙江省で使用される幼児用教材を見ることは、全国の農村部における就学前教育の動向を把握するのに有効的であると考えられる。

以下で、浙江省における幼稚園教材を資料として分析するが、その際、特に「言語」領域に焦点を当てて分析をしたい。というのは、言語の領域が中国の教育格差の課題を考える上で極めて重要な意味を持つと考えられるためである。これについて教育格差に言及したアマルティア・センの次の議論は極めて示唆的である。センは「読み書きができない場合、人は自らの法的権利を理解し、それを行使する能力が限られてくる」と、そして「基本的な問題は、識字力や計算能力がないこと自体が危険なのである。読み書き計算、意思の伝達ができないことはとてつもなく困窮状態である」という。さらに「教育の格差を縮めることが重要な理由は、世の中をより安全で、より公平な場所にするためである」と読み書きの重要性を強調した(セン 2006: 9-10)。特に農村部の居住者に対する教育は彼らの生活の質と生産力を高め、農村の貧困を軽減するのに有益であるという議論もなされている(Atchoarena & Gasperini 2003)。そして、センとドレーズ(2013)は、読み書きができないということは牢屋に閉じ込められているようなものであり、そこから逃げる扉をあけてくれるのが学校教育であるという指摘をしている。こういった議論を踏まえれば、言語の教育は、個人にとって不可欠であるだけでなく、格差の問題を考える上で必須のテーマになると考えられる。

中国の就学前教育における言語教育の研究としては、Li, WangとWong(2011)の研究がある。ここでは、幼稚園教師に対するアンケート調査が行われ、教師の70%は就学前教育における言語能力を育成する目的は小学校に入るための準備であると認識し、85%の教師が識字能力を言語能力の主要なファクターであると考えていることが明らかにされた。この研究は、アンケート調査を元に中国の就学前教育における言語に関する分析をした点で重要な研究であるといえるが、言語能力の育成の内容について国家政策の意図との関連性というレベルでの議論は行われてはいない。Liらの研究に対して、Hua(2013)の研究は、初等教育の段階のものであるが、

教材と政策に関する研究を行ったものとして注目される。具体的には、1970年代と2000年代教育部が公布した小学校の言語カリキュラムの文書と小学校一年生向けの教師用教材を分析対象にしている。分析の結果、教材の内容は、70年代の単純な言語知識から2000年代の言語カリキュラムは政治的な観点から作られたものから、学生の個人の発達に焦点を置いたものへと変わったという結論が示された。しかし、Huaの研究は2000年までのものを扱ったものであり、その後の分析はなされていない。2010年代から教育公平性を以降の変化を見ることは必要に思われる。加えて、2010年から教育公平性を中央政府が重視してきたことを考慮するなら、公平性と言語という新たな軸で中国の就学前教育における言語能力を捉え直す必要があるのではないだろうか。以上のことから、以下本稿では、2000年代以降の農村部の幼児園教材を対象として、国家政策の変化との関連から言語能力の育成の内容の変化を追い、その特徴を明らかにしたい。

## 2. 研究対象と方法

### 2.1 研究対象

幼児園教材は中国の就学前教育を見るための重要な手がかりであるとなる。というのも、中国ではすべての幼児園で幼児園教材が使用されているからである。幼児園教材とは「幼児園の教師が幼児の学習を指導するための材料」であり、「中には教師用教材、幼児用教材と教育用図片がある」（顧明遠編 1990: 282）と定義され、すべての教師と家族に配布されることが前提とされている。幼児園では、「幼児の取りやすい場所に展示し、幼児が自由に使用すること」を促すなど、幼児の閲覧を保証することが求められている。さらに、教材は休み期間中に家庭で、幼児の実態に基づき、適切な内容を選び家族で使うことが可能となるように工夫されたもので、幼児用教材の費用は保育料の中に初めから含まれて配布されている（盧 2017）。

本研究では浙江省の農村部向け指定教材の『課程指導』を研究対象にする。2002年に、中国の浙江省ではカリキュラム改革の方針に合わせ、省教育庁のもと、『幼児園課程指導』（第一版）（以下『課程指導』と表記する）という幼児園教材が出版された。『課程指導』は省教育庁による農村部向けの指定教材のため、浙江省内だけではなく、全国の農村地域にも広く利用されている教材である。『課程指導』は数多くの農村幼児園に通う幼児に影響を与え、カリキュラム改革が始まった直後に第一版を出したことから、その変遷および教材の特徴が注目される。その中の幼児用教材には『子どもたちの本』、『幼児活動操作材料』、『数学教材』が設けられている。第一版の『子どもたちの本』は第二版では『幼児活動操作材料』へと名称が変わる。『数学教材』は第二版から新設されたもので、一年間に2冊配布される。具体的に、第一版では2ヶ月1冊の『子どもたちの本』が使用されるのに対し、第二版では1ヶ月に1冊の『幼児活動操作材料』が使用される。『子どもたちの本』は第一版（2002）では6冊だったが第二版（2014）では12冊に増えた。加えて、第二版の2冊の『数学教材』を含め、本研究では合計20冊の年長児向け幼児用教材に着目する（表1）。

表1. 年長児向け幼児用教材（浙江省《幼児園課程指導》）に関する情報

教材	2002（第一版）	2014（第二版）
出版社	新時代出版社	新時代出版社
出版年	2002	2014（最新版）
作成基準	『幼児園教育指導綱要』（2001）	『幼児園教育指導綱要』（2001） 『浙江省学前教育保教指南』（2008）
編集者	浙江省《幼児園課程指導》編集委員会	浙江省《幼児園課程指導》編集委員会
教材の構成（上半期）	『子どもたちの本・上1』、『子どもたちの本・上2』、『子どもたちの本・上3』	『幼児活動操作材料・上1』、『幼児活動操作材料・上2』、『幼児活動操作材料・上3』、『幼児活動操作材料・上4』、『幼児活動操作材料・上5』、『幼児活動操作材料・数学上』
教材の構成（下半期）	『子どもたちの本・下1』、『子どもたちの本・下2』、『子どもたちの本・下3』	『幼児活動操作材料・下1』、『幼児活動操作材料・下2』、『幼児活動操作材料・下3』、『幼児活動操作材料・下4』、『幼児活動操作材料・下5』、『幼児活動操作材料・下6』、『幼児活動操作材料・数学下』
総計冊数	6	14

出典)『幼児園課程指導』の幼児用教材第一、第二版に基づき、筆者が作成した。

注:「数学教材」は「子どもたちの本」と合わせる形で教師の指示によって随時使用される。

## 2.2 研究方法

本研究では2002、2014年の新時代出版社の年長児向けの幼稚園教材における言語能力（「言語」領域）の取り扱いの変化を見ていく。具体的に、本研究における言語能力とは、「綱要」における「言語」領域に規定された内容を指す。「言語」領域はまた「交流力」、「表現力」、「読解力」、「標準語を話す能力」、「感受力」、「筆記能力」<sup>2</sup>といった下位領域から構成される。『課程指導』のカリキュラムは単元主題カリキュラム<sup>3</sup>に属する。単元主題カリキュラムは主題、大単元、小単元に構成される。小単元について教師用教材ではどの領域に属するのか指定されている。

本稿では、第一に教師用教材の指定に基づき、各版のすべての小単元の内容を「綱要」における五大領域ごとに整理する。そして、各領域の小単元の合計ページ数およびそのページ数が版ごとの教材にしめる割合を算出する。注意すべきなのは、単元主題型のカリキュラムでは小単元は各領域から統合的に構成されるということである。例えば、一つの小単元が「科学」と「言語」という二つの領域の内容から構成される場合、それぞれ「科学」と「言語」領域の内容として認定されることになる。したがって、一つの小単元に複数の領域が認定されることがあるため、各領域の割合を合計すると100%を超えることは想定できる。第二に、「言語」領域に着目する形で、二つの版のそれぞれの結果の分析と比較を行う。第三に、以上の結果に対し、政府が公表した政策から考察を行うこととしたい。

## 3. 算出結果

### 3.1 五大領域の変化とカリキュラムの統合性の向上から

図1は「綱要」における五大領域の割合が第一版から第二版にかけてどういった変化を経てきたのかを表わしたものである。図1からいくつかの変化が確認できる。第一に、図1に基づき、第一版の各「領域」の割合の合計は115.5%に対し、第二版の割合の合計は125.6%と増加していることがわかる。このように、第二版の各領域の総計は第一版より高いということは、第二版の教材では一つの小単元に各領域が重なる場合が多く、カリキュラムはより統合的なものになっていることを意味する。第二に、第一版では「社会」領域が占めるページ数の割合が最も高かったが、第二版になると23.3ポイントもの急激な減少がみられる。この一方、「言語」領域が第一版から第二版にかけて、割合の変化は右肩上がりで、18.3ポイントの急増が見られ、その割合はすべての領域では最も高い。ここからカリキュラムの中心は「社会」領域から「言語」領域に移ったという傾向を見ることができ。この他に、図1からは「科学」領域の割合も大幅に増加したのに対し、「芸術」の内容の割合が低くなったこと、「健康」領域はわずかの増加に止まっていることも見て取ることができる。

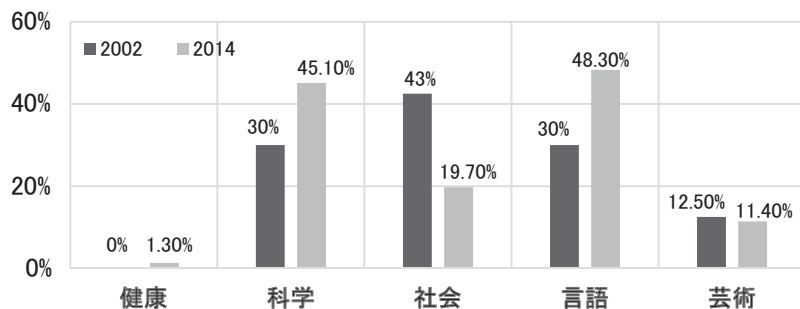


図1. 第一版と第二版における五大領域の割合の変遷

出典)：2002年版と2014年版の『課程指導』の年長児幼児用教材に基づき、筆者作成

### 3.2 「読解力」を中心とする統合的カリキュラム

図2は第一版（2002）と第二版（2014）における「言語」領域の下位領域の割合の変化を示す図である。図2を見ると、まずどちらの版においても「読解力」の割合は最高であることを確認することができる。そして「筆

記能力」は第一版ではなかったが第二版では初めて導入され、その割合が11.7%になっていることがわかる。第三に、第一版と比べ、第二版では「感受力」、「交流力」と「表現力」の割合が高くなっていることもわかる。このことは、読解力だけではなく、幼児の豊かな感情の育成を目指す「感受力」、アクティブラーニングのための「交流力」や「表現力」の割合が増加し、言語学習の構成内容がより多様になっていることを示しているといえよう。

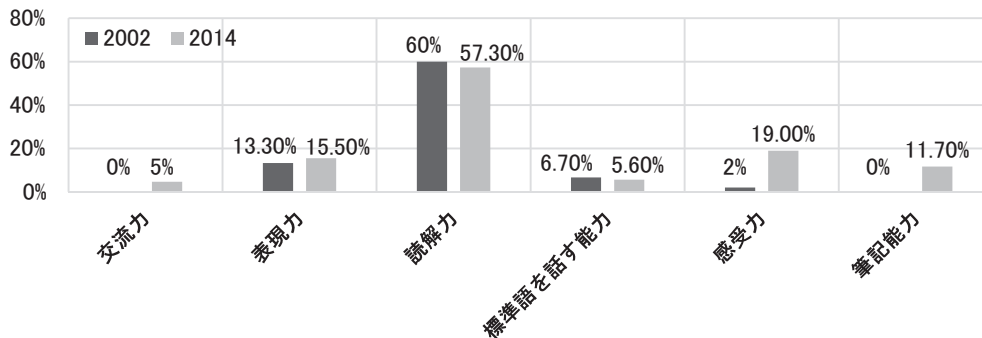


図2. 第一版(2002)と第二版(2014)における「言語」領域の下位領域の割合の変化  
出典：『課程指導』の2002版と2014版の年長児幼児用教材に基づき、筆者作成

#### 4. 事例に見る言語領域の変化の特徴：小単元「紙の発明」から

みてきたように、第二版では小単元における各領域がより重複するようになり、カリキュラムはより統合的なものになってきている。とはいえ、「読解力」の「言語」領域における割合はすべての項目で依然として最も高いことも明らかである(図2)。そこで以下において、読解力の育成を目標とする小単元を事例に、2つの版の中で言語能力は具体的にどのような変化を経てきたのかをみることにしたい。具体的に、『課程指導』の第一版と第二版に出現する同じ小単元、「紙の発明」に着目し、その変化を明らかにする。

表2. 事例小単元の詳細

小単元名	「紙の発明」(2002)	「紙の発明」(2014)
領域	「言語」	「言語」
下位領域	「読解力」	「読解力」
主題	「年長クラスになった」	「何？私は見つけた！」
大単元	「紙」	「紙の物語」
教材のサイズ	17cm×19cm	19cm×21cm
ページ数	1	6
文字数(音標 <sup>4</sup> なし)	83	465
挿絵の数	4	18

出典：『課程指導』の第一版幼児用教材(年長クラス・下 子どもたちの本1『年長クラスになった』p.20)と第二版の幼児用教材(年長クラス・下 幼児活動操作資料4『何？私は見つけた！』pp.13-18)に基づき、筆者作成

表2は「紙の発明」という小単元の構成を表したものである。2002版の「紙の発明」では、中国の蔡倫は中国最初の紙を発明した者であるということを幼児に伝えることが小単元の目標とされる。小単元の構成について、挿絵4枚と83文字の説明、「1800年前の東漢時代に、中国の蔡倫ははじめて紙を発明した」と書かれている(写真1)。第二版になると、挿絵は全部18枚で、465の文字で蔡倫が紙を発明したプロセス、「紙作りのプロセス」を細かく紹介した6頁からなる。その中で2002版に現れなかった四字熟語は2014版では2語確認できる。第二版の「紙の発明」になると、「紙の発明は中国の四大発明であることを幼児に伝える。紙は日常生活で広く利用され、紙を節約することを理解させる」ことは小単元の目標とされている。

二つを比較すると、第一版では1頁以内ですべてが説明されているのに対し、第二版では6頁にわたり、それぞれの頁で2-3枚の挿絵が掲載されており、ページ数が増え、挿絵の数が多くなり、より見やすくなったこと、また、キャラクターの会話が吹き出しの中に書かれているなど(写真2)、単なる説明文ではなく会話が用いられ、第二版では、読解の内容が幼児により伝わりやすいように工夫がなされていることがわかる。さらに、第二版では小単元の文字数が多くなること、四字熟語の使用が確認できることから、幼児により多くの文字とより複雑な中国語の表現を把握させるねらいがあることも考えられる。第一版と比べ、小学校に進学するための言語的準備がさらにレベルアップしたともいえよう。



写真1.「紙の発明」(『課程指導』(2002)  
『子どもたちの本1』p.20)  
第一版 年長クラス・下



写真2.「紙の発明」(『課程指導』(2014)  
『幼児活動操作資料4』p.18)  
第二版 年長クラス・下

以上の変化は中国の就学前教育に関する国家政策の変化と一致する。第二版の小単元が出版される前に公表された政府文書の中で、2012年中国教育部が発行した「発達指南」の影響力が大きいと考えられる(表1)。2001年の「綱要」と比べ、2012年の「発達指南」における読解力と筆記能力を育成する目標はレベルアップしている。筆記能力について、「綱要」では、幼児の文字に対する興味を育てると規定されているのに対し、2012年の「発達指南」では、自分の名前を書けること、文字の表す意味を理解することに変わる。これは第二版の小単元では初めて「筆記能力」が導入されたことに関係している。読解力の育成に対し、それまでの幼児が図書や絵などの内容を理解する能力の育成という狙いを超えて、読解に集中できること、ストーリーの筋立てを踏まえ、これからの展開を予測し、あるいは新しいストーリーをつくることなどが望まれるようになった(表3)。第二版の事例小単元では文字数が多くなり、幼児が長い文章に集中できることが望まれるようになっている。また、「言語」領域の下位領域については、第二版の小単元は第一版と比べ、「感受力」、「交流力」と「表現力」の割合も高くなっている。すなわち、読解力だけではなく、幼児の豊かな感情の育成、交流力や表現力のウェイトが増加し、「言語」領域の構成内容がより多様になっていることがわかる。子どもの全面的な発達を図るためのカリキュラムの工夫も見られる。

表3. 読解力と筆記能力に関する規定(年長児)

	2001年「幼稚園教育指導綱要」	2012「3-6歳児における学習と発達に関するガイドライン」
読解力	幼児が図書や絵などの内容を理解する能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>読解に集中できる</li> <li>文学作品の主要内容を語れる</li> <li>ストーリーの筋立てを踏まえ、これからの展開を予測し、あるいは新しいストーリーをつくることのできる</li> </ul>
筆記能力	幼児が生活における簡単な記号と文字に興味を持ち、読解と合わせて筆記能力を育成する	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の名前を書くことができる</li> <li>絵と符号を使い、物事とストーリーを表す</li> <li>図書の中の文字や符号に興味を持ち、文字の表す意味を理解する</li> </ul>

出典) 中国教育部のHP<sup>5)</sup>に基づき、筆者作成。

## 5. トップダウン型の教育政策と教材の使用方法

これまでみてきた浙江省の教材については、その使用方法についても詳細な使用方法が決められている。中央政府の動きを受けつつ、2008年には浙江省政府により「浙江省における就学前教育と保育に関する指南」が公表された（表1、以下「浙江指南」と略す）。これは中央政府による2001年の「綱要」に基づき、浙江省が作成した県内の就学前教育に関する指針である。「綱要」の公布を契機に、中央政府という行政の介入によってトップダウン型の改革が始められたが、この改革は今までの「教師主導型」、「教室教材中心」の就学前教育を「子どもを尊重すること」、「幼児の主体性を重視すること」、「遊びに基づく学習」へと転換させる「教育理念の革命」と評価されている（劉 2007: 25）。

「浙江指南」では幼稚園教材について、「幼稚園は国家あるいは省レベルの教材審査委員会に審定され、基準を満たす教材と教師用教材を作らなければならない。省一級幼稚園<sup>6</sup>は教材と教師用教材を選択する自主権を有しているが、他の県鎮部<sup>7</sup>を単位とする幼稚園は県鎮レベルの教材選択委員会によって統一的に教材が選択され、指定される」と書かれている。さらに、「幼稚園独自のカリキュラムと教材を推奨するが、園の開発したカリキュラムの比率は省レベルの一級幼稚園の場合、20%を超えてはならない。省レベルの二級幼稚園は10%、そのほかの幼稚園は5%を超えてはならない」と規定されている。カリキュラムと教材選択の自由をある程度保証されている一級、二級の幼稚園は都市部に分布することが多く、農村部における幼稚園は「そのほか」に属しており、教材とカリキュラムはほぼ指定され、統一の教材が使われている。本研究対象の『課程指導』は浙江省《課程指導》編集委員会が編集した教材で、県内の農村部における使用が行政側によって指定され、「単元主題型」をカリキュラムにするものである。「浙江指南」において「一日はすべてカリキュラムである」というカリキュラムの理念が示された。具体的に、「教育活動を行う際に単元主題型のカリキュラムが適切である」と規定され、「原則上毎週、言語、科学、数学、音楽、美術、体育、社会等の集団活動を各1-2回を行うこと。毎週の集団活動の合計回数について、年少クラスは5-8回、年中クラスは8-10回、年長クラスは10-15回を目安にする」と定められる。このように、どの教材、どのカリキュラムをどのように使用できるのかは政府によって指定される。

このような政府によるカリキュラムに関する詳細な規定は、中央政府のトップダウン型教育改革の延長線上にあって、同様のトップダウン型の教育改革を示すものと言えるのではないだろうか。民間から始まる下から上へという改革とは異なり、政府が介入し主導するカリキュラム改革は規模、普及の範囲、資金の投入、教師の研修などの面において、その影響力は非常に大きい。2008年の浙江省の『課程指導』が出されたのち、中央政府は2012年に「発達指南」を出し、再度知的能力の重視へと舵を切ったが、これもまた2001年からはじまった改革の延長線上にあるトップダウン型の統制であると言える。本稿で扱った2012年の教材は、トップダウンの教育改革を背景にその内容を変化させたといえよう。

そしてこのようなトップダウンの改革が最も顕著に現れるのが農村部の教育ではないだろうか。すでに述べたように、2010年には中央政府による「国家中長期教育改革と発展計画綱要（2010-2020）」の中で、「農村の就学前教育の発展に重点を置き、就学前教育をより広く普及させる」という政策の方向が示された。都市部と大きな格差をもつ農村部において、質が比較的に保証されている教材とカリキュラムが政府によって指定されていることは、トップダウンで教育格差を是正しようとする試みであると言える。しかし、格差の是正のために、農村部の児童に都市部と同じレベルの試験とカリキュラムを適用させることはかえって問題であるという指摘もなされてきた。余は早くから中央政府の農村教育に対する統制は都市化を進めるためであるという批判してきた（余 2008: 17-22）。とはいえ、幼児教育に関しては、トップダウンの介入がより入りやすいということも指摘されてきている。例えば、Kessierは、幼児教育は社会的不平等の再生産過程に組み込まれ、そのメカニズムの一翼を担うものとして機能しているという指摘をしてきた（Kessier 1991）。現在、教育の公平性を保つ面において、幼児期への注目が高まっていることもこの動きに拍車をかけている。特に、途上国の場合、政策的介入はより行いやすく、実証研究でも学校要因が学力に強く影響することがすでに解明されている（内田・浜野編 2012）。

本研究における教材の量的変化から見える「言語」領域と「読解力」の強化方針は政府の農村部における児童の競争力を高めようとするねらいが窺える。より長期的に見れば、農村部における児童の競争力の向上は中国の経済発展のための人材を育成すること、貧困を解消することにもつながりうる。

## 6. おわりに

中国政府の介入というトップダウン型の改革の推進方式は、農村部の就学前教育における言語能力の重視という2012年「発達指南」が公布された後の新たな改革を加速させ、その着実な実施を支えるものであるといえよう。

言語の教育は極めて政治性を持つ。例えば、Campono (2007) は学校で獲得するリテラシーはその国の特定の時期における強いイデオロギーを反映していると述べたが、同時に、学校のリテラシーの社会的、政治的な特質はカリキュラムによって表現され、これらのカリキュラムはダイナミックで、経済、文化、国家主義的な要素に伴って変化することも指摘されている (Wei & Thomas 2006)。見てきたような中国の幼稚園教材における言語能力の変化はカリキュラムの社会的、政治的特質を反映するものと言えるのではないか。「子どもを中心に」することを出発点にしたカリキュラム改革は2001年の「綱要」の公表を契機に始まったが、その直後の2002年に出版された幼稚園教材と比べて、2012年の学力を重視する「発達指南」が公表された後の2014年の幼稚園教材において、「言語」領域および「言語」領域における「読解力」がカリキュラムの中心となっていることはこれを示す一つの例となろう。このような幼稚園教材における言語能力の扱いの変化は中国における就学前教育の社会的背景の変化を反映しているといえよう。もちろん、2014年の幼稚園教材で単に読解力だけに重点がおかれているだけではなく、子どもの全面的な発達を図るために、言語学習の構成内容がより多様になっていることは見過ごすことはできないが。

本研究は、幼稚園教材における言語能力記述の取り扱いの量的変化を「綱要」(2001) と「発達指南」(2012) における言語に対する規定の変化、浙江省独自のカリキュラム政策と関連させながら議論した。農村部の幼稚園教材の変化から見える「言語」領域と「読解力」の強化方針は農村部における児童の言語に基づく競争力を高めようとするねらいを反映できると考えられる。さらに、早期からの知的資産の再分配は農村部における貧困の解消、最終的に地域ないし国家経済の発展に貢献できる人材の育成という政府の意図も考えられる。ここから、農村部の教材において子どもの全面的な発達をめざすための工夫が確認することができる。とはいえ、農村児童のリテラシーを向上させようとする政府の意図も見取ることができるのではないだろうか。

「真の教育公平」を実現するために、中国中央教育科学研究院 (2002) は「質の高い農村における就学前教育」といったコンセプトを提唱している。浙江省の『課程指導』の変化に見られるように、よりよく幼児に教材の内容を伝えるために、挿絵と文字のサイズを大きくし、表現方法を工夫するなど教材の質が改善されたことを見ることができた。さらに、近年、浙江省だけではなく、2016年に中央政府は「国務院の中西部における教育発展に対する指導意見」を公表し、中国の中西部における幼児教育の公平性を確保するためのより具体的な対策が打ち出した。そこでは、サービス型私立幼稚園<sup>8</sup> に対する財政的援助、教具や教材などの物的保障、貧困地域に行く意欲のある保育学生への授業料免除や人事的優遇政策の実施などが挙げられている。

本研究では使用が指定される農村部教材を分析することで政策の意図の把握を試みた。しかし、政府の政策意図をより具体的に把握するためには、教材執筆者<sup>9</sup> の考え方を分析し、幼稚園教材はどのように企画され作られているのか、また幼稚園現場で幼稚園教材は具体的にどのように使用されているのか分析することが必要になると考えられる。今後の課題として検討していきたい。

### 【注】

1. 浙江省政府は2008年からGDPの増加率を初めとする経済的成長率、公共サービスなどの評価基準から県ごとの総合的評価を行っている。評価の結果、衢州、丽水、淳安、永嘉など26の県が低開発県（欠发达县）と評価される。
2. 「言語」能力の下位領域について『綱要』(2001) において以下のように定義がなされている。「言語」領域における「交流力」の育成とは幼児が自由に教師、仲間と話し合い、楽しい雰囲気と言語の能力を育成することである。「表現力」は幼児が大胆に自分の考えと感想を述べ、物事あるいはプロセスを伝えるように他人に説明する能力である。「読解力」は幼児が図書や絵などの内容を理解する能力のことを指す。「標準語を話す能力」とは標準話（国家共通言語）を聞いて理解し、話せる能力である。「感受力」は幼児が文学作品とその作者が伝えようとする多様な感情とその美しさを吟味し、共感する能力である。「筆記能力」とは幼児が生活における簡単な記号と文字



- に興味を持ち、読解と合わせライティングの能力を指す。
3. 単元主題カリキュラムに関して、一つの学年に5冊の幼児用教材があれば、教材は5のテーマからなる。さらに、一つの主題は2—3の大単元から、大単元は小単元を単位とするものからなっている。たとえば、中国上海市の幼児園教材『多元』は同じ単元主題型カリキュラムである。
  4. 中国語の音標はピンイン（拼音）と呼ばれる。
  5. 中国教育部HP：<http://www.moe.gov.cn/>（2017/8/26アクセス）
  6. 『浙江省幼児園等級評定標準』（2015）では幼児園のクラス規模、設備、園長、教師の資格と教員の配置と待遇、園の管理と経費等の面から浙江省の幼児園を省一級幼児園、二級幼児園に評定する。例えば、省一級幼児園の場合、1人の学生の平均用地は4㎡以上である。クラスの規模について平均30名以下で、一つのクラスには3名（幼児園教師2名、保育員1名）の教員が必要となる。すべての教員が幼児園教師の資格を持ち、その50%は必ず専門学校（4年間制）およびそれ以上の学歴を持つ。省二級幼児園の場合、1人の園児の平均用地は3㎡以上である。クラスの規模に関して、年少クラスは28人、年中クラスは33人、年長クラスは38人以下で、一つのクラスは平均2.5名の幼児園教師が要求される。すべての教員は幼児園教師の資格を持つことが必要であるが、その30%は必ず専門学校（4年間制）およびそれ以上の学歴を持つ。
  7. 『中華人民共和國憲法』（2004）によれば、中国の行政区分には省、市、県、郷、村という五つのレベルがある。鎮は郷の行政区分にある。省、市、県、郷の政府は都市部に位置づけられることに対し、村レベルの政府は農村地域に位置し、村の行政管理を実施する。
  8. サービス型私立幼児園は市の幼児園開設基準、すべての幼児を募集対象にすること、政府が指定した、あるいはアドバイスした保育料金を受けることという三つの基準に準じる園である。
  9. 幼児園教材の執筆者の概要について下記の論文で言及している。（盧 2017a「中国の就学前教育における愛国主義教育—北京（2014）と上海（2013）の幼児園教材の比較分析から—」『子ども学研究紀要』、第五号）

### 【参考文献一覧】

- アマルティア・セン(著)、東郷えりか(訳) 2006 『人間の安全保障』 集英社
- Atchoarena, D. & Gasperini, L. 2003, *Education for rural development: Towards new policy responses*. Paris: International Institute for Education Planning (IIEP) UNESCO.
- 浜野隆 2012 「ベトナムとモンゴルにおける子育ての格差」内田伸子・浜野隆 編『世界の子育て格差—子どもの貧困は超えられるのか』金子書房 pp.63-78.
- Campono, G. 2007, *Immigrant student and literacy: Reading, writing, and remembering*. New York, NY: Teachers College Press.
- Chan, Carol K.K., Rao, Nirmala. 2007, *Revisiting The Chinese Learner Changing Contexts, Changing Education*, Springer, pp. 211-231
- Chambers, R. 1983, *Rural development: Putting the Last first*. London: Longman.
- 顧明遠『教育大辞典』上海教育出版社, 1990.
- Dreze, Jean & Sen, Amartya. 2013, *An Uncertain Glory India and Its Contradictions*. Penguin Books Ltd. (アマルティア・セン、ジャン・ドレーズ (著)、湊一樹 (訳) 2015 『開発なき成長の限界—現代インドの貧困・格差・社会的分断』明石書店)
- Hua, Shaocong. 2013, "A Small Corner of the Iceberg: Changing Trends in Early School Literacy in China". *Childhood Education*. Vol.89, No.3, pp.159-164.
- Kessler, Shirley A. 1991, "Early Childhood Education as Development: Critique of the Metaphor", *Early Education and Development*. Vol. 2, No 2, pp.137-152.
- 劉炎・潘月娟・孫紅芬 (2007) 「中国大陆近二十年来幼儿园教育改革的历程回顾与现状分析」朱家雄編『中国視野下の学前教育』華東師範大学出版社 pp.18-40
- Li, H. Wang, X. & Wong, J. 2011, "Early Childhood Curriculum Reform in China: Perspectives from Examining Teachers Beliefs and Practices in Chinese Literacy Teaching", *Chinese Education and Society*, Vol.6. pp.5-23.
- 盧中潔 2017a 「中国の就学前における愛国主義教育—北学（2014）と上海（2013）の幼児用教材の比較分析から—」『子ども学研究紀要』第五号、pp.51-60.
- 盧中潔 2017b 「中国の幼児園教材」『幼児の教育』第116巻、第3号、pp.50-53.
- Xu, Shuqin. & Law, Wing-Wah. 2015, "Rural Education Urbanization: Experiences and Struggles in China Since the Late 1970s". *Global Education Review*. Vol. 2, No. 4. pp.78-100.
- UNESCO, 1993, *The World Science Report*. Paris: UNESCO.
- UNESCO. 1996, *Leaning: Treasure Within*. Paris: UNESCO (天城勲(監訳) 1997 『学習：秘められた宝』ぎょうせい)
- 王湛 2002 「在全国幼儿教育工作者座谈会上的讲话」教育部基礎教育司組織 編『「幼児園教育指導綱要（試行）」解説』江蘇鳳凰教育出版社 pp.1-28.

盧 中国の幼稚園教材から見る農村部の就学前教育改革

- Wei, B. & Thomas, G. P. 2006, "An examination of the change of the junior secondary school chemistry curriculum in P.R. China: In the view of scientific literacy". *Research in Science Education*, Vol. 36, pp.403-418.
- 王傑 2013 「中国の教育機会格差—後期中等教育機会の「城郷」格差に着目して」耳塚寛明編『学力に挑む』金子書房、pp.103-118.
- 井口博充 2003 『情報・メディア・教育の社会学—カルチュラル・スタディーしてみませんか』東信堂
- 一見真理子 2008 「全人民の資質を高める基礎 「早期の教育」競争力と公平性の確保」泉千勢・一見真理子・汐見稔幸編『世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店、pp.214-241.
- 余秀兰 2008 「乡土化？城市化？—我国农村教育发展的困境与出路」『江蘇教育研究』第7期、pp.17-22.
- 張海麗 2007 「对幼儿教材現狀的調查与分析」華南師範大学修士論文.
- 中共中央文献編輯委员会 (1993) 『邓小平文选』第三卷、人民出版社.
- 中央教育科学研究所 2002 「新《纲要》与农村的高质量幼儿教育」教育部基礎教育司組織編『「幼稚園教育指導綱要（試行）」解説』江蘇鳳凰教育出版社 pp.234-253.